

副島蒼海書

丞相祠堂何處尋

錦官城外柏森森

映階碧草自春色

隔葉黃鸝空好音

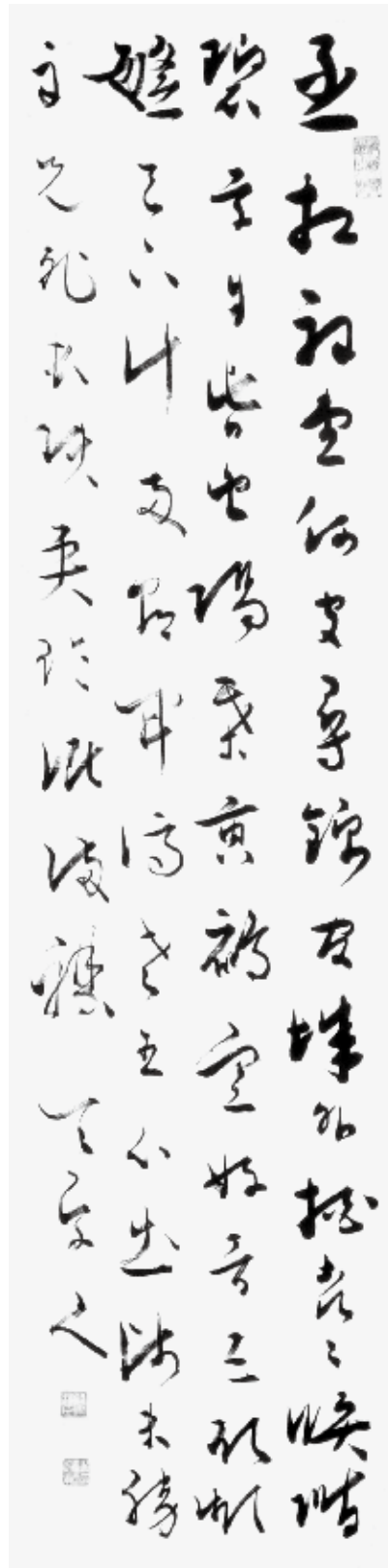
三顧頻繁天下計

兩朝開濟老臣心

出師未勝身先死

長使英雄淚滿襟

一々學人



副島蒼海 そんじま そうかい

文政十一年（一八二八）明治三十八年（一九〇五年）佐賀藩の国学者枝吉種彰の二男として生まれ、三歳のとき副島家を嗣ぐ。幼名は次郎。元服して龍種とし、のち種臣と改める。号は蒼海。別に一一學人と号する。維新の元勳で、明治の傑出した能書家。明治六年、西郷隆盛らとともに「征韓論」を主唱して破れ、政治の座から退いたことは周知のところだ。

掲載の作品は、豪放な趣と異なり、独特の草書体とデホルメ、沈逸な筆致で、詩意を汲むかのように静謐な一幅です。出典は、盛唐の詩人杜甫の「蜀相」と題する七言律詩。蜀主劉備（漢の後裔で劉氏を名乗る。枝吉氏は漢の高祖劉邦の末裔という）の「三顧の礼」の故事をふまえ、丞相諸葛孔明を追慕する内容です。なお、落款印三顆は陳曼壽の刻です。

（服部大超蔵・記）

积文しつぶん 庶幾中庸しうきちゆう。勞謙謹勅らうけんきんしよく。聆音察理りやうおんさつり。鑑貌辨色かんぼうべんしき。貽厥嘉猷いけつかきう。勉其祗植めんとしちく。省躬譏誡しやうこうきかい。寵增抗極ちゆうぞうかうごく。殆辱近耻たいうじき。林宰幸卽りんさいしやうじく。
 よみ 中庸を庶幾い、勞謙して謹勅にす。音を聆き理を察し、貌を鑑み色を辨す。厥の嘉猷を貽し、其の祗植を勉む。躬を譏誡に省み、
 寵増せば抗極まる。辱に殆く恥に近きときは、林宰に即かんことを幸え。

庶幾中庸 勞謙謹勅 聆音察理 鑑貌辨色 貽厥嘉猷 勉其祗植 省躬譏誡 寵增抗極 殆辱近耻 林宰幸卽
 系理鑑貌 貌辨色 貽厥嘉猷 勉其祗植 省躬譏誡 寵增抗極 殆辱近耻 林宰幸卽
 勉其祗植 省躬譏誡 寵增抗極 殆辱近耻 林宰幸卽
 殆辱近耻 林宰幸卽

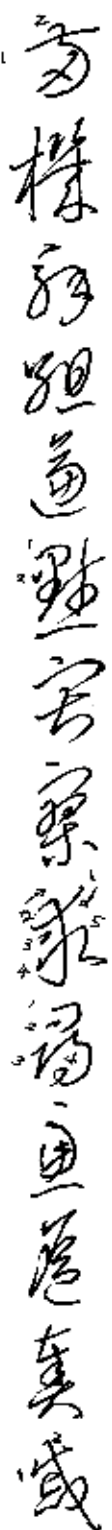
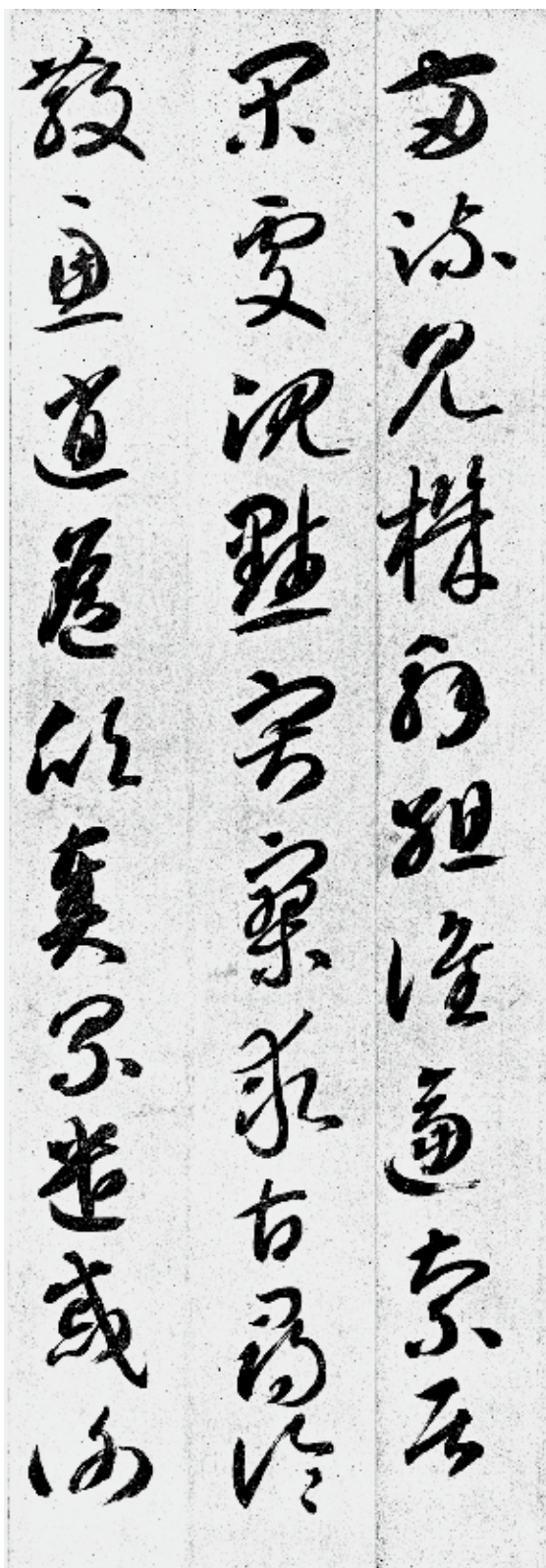
庶幾中庸 勞謙謹勅 聆音察理 鑑貌辨色 貽厥嘉猷 勉其祗植 省躬譏誡 寵增抗極 殆辱近耻 林宰幸卽
 系理鑑貌 貌辨色 貽厥嘉猷 勉其祗植 省躬譏誡 寵增抗極 殆辱近耻 林宰幸卽
 勉其祗植 省躬譏誡 寵增抗極 殆辱近耻 林宰幸卽
 殆辱近耻 林宰幸卽

- 漢字師範条幅部＝臨書部は本誌図版又は各種古碑法帖（選択自由）の臨書作品とする。
- 漢字条幅臨書部＝準師以下は本誌図版中の字句（字数自由）に限る。
- 創作倣書部は規定課題語句による創作または倣書作品のみとする。

註・出品規定熟読のこと。条幅出品料は本院発行の「条幅出品専用シール」をお使い下さい。 ※半紙臨書課題「庶幾中庸」

釈文Ⅱ兩疏見機。解組誰逼。索居閑處。沈默寂寥。求古尋論。散慮逍遙。欣奏累遣。感謝：

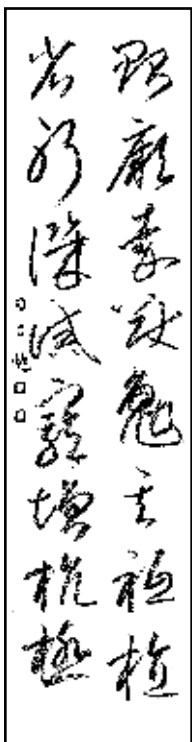
よみⅡ兩疏は機を見、組を解きては誰か逼らん。索居閑處し、沈默して寂寥たり。古を求めて尋ね論じ、慮いを散じて逍遙す。
 欣び奏まり累いを遣り、感みを謝して：



作品に適した語句の草稿例

①半切に書くときは図版を見て線の太さ等を補う

②このほかの箇所も、鉛筆等で文字の大小等のバランスを心掛ける。



※「二月号」懐のりっしんへんについて「…筆路に書かれた以外の筆順も考えられます。」

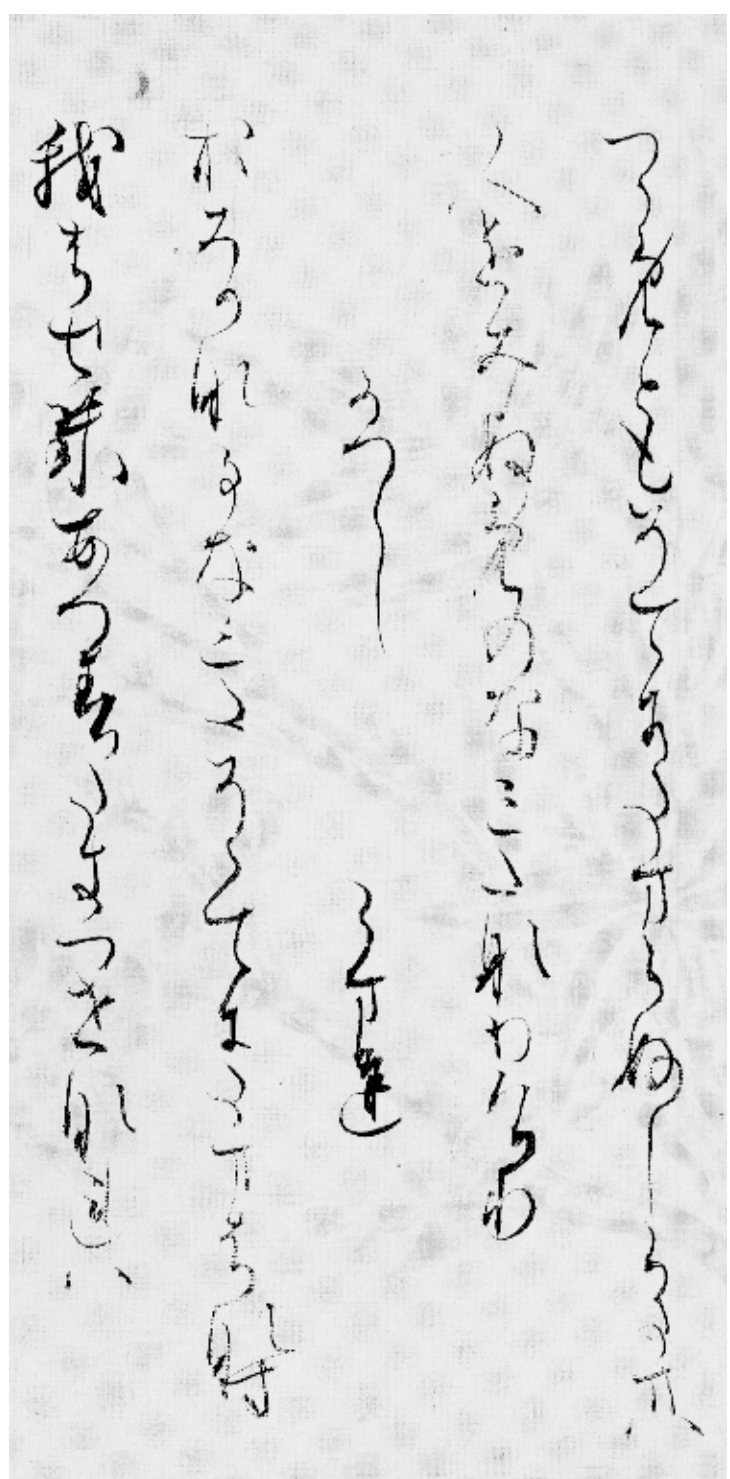
伝 小野道風 本阿弥切 (一)

解説 檜崎 華祥

本阿弥切は、十二世紀初期に書写されたと推定される「古今和歌集」の写本です。小野道風を伝称筆者としますが、書風・料紙などからみて道風より二世紀ほど後の院政期の作と思われます。かつて安土桃山から江戸初期に活躍した能書家の本阿弥光悦が一部を愛蔵していたと伝えられるところから「本阿弥切」の名があります。

【よみ】 つゝめどもそでにたまらぬしらたまは人をみぬめのなみだなりけり

於可那 三多曾 可へし こまち 万遅 者 幾 春多支 世那連八
おろかなるなみだぞでにたまはなす我はせきあへずたぎつせなれば



【大意】

包んでも袖にたまらずにこぼれる白玉は、あなたにお目にかかれぬ私の涙なのでした。
返し 小町
あまり心がこもっていない涙だからこそ、袖の上で玉になるのでしょう。私の涙はとても堰き止めることなどできません。

- ◎条幅臨書課題(総務～新規)=【よみ】の太字部分を臨書してください。
- 半紙課題(総務～準初段)=たて17.8cmよこ10cmの野線を鉛筆で書いて 図版全部を臨書してください。
- 半紙課題(一級～新規)=各級の一般部かな規定手本により出品して下さい。

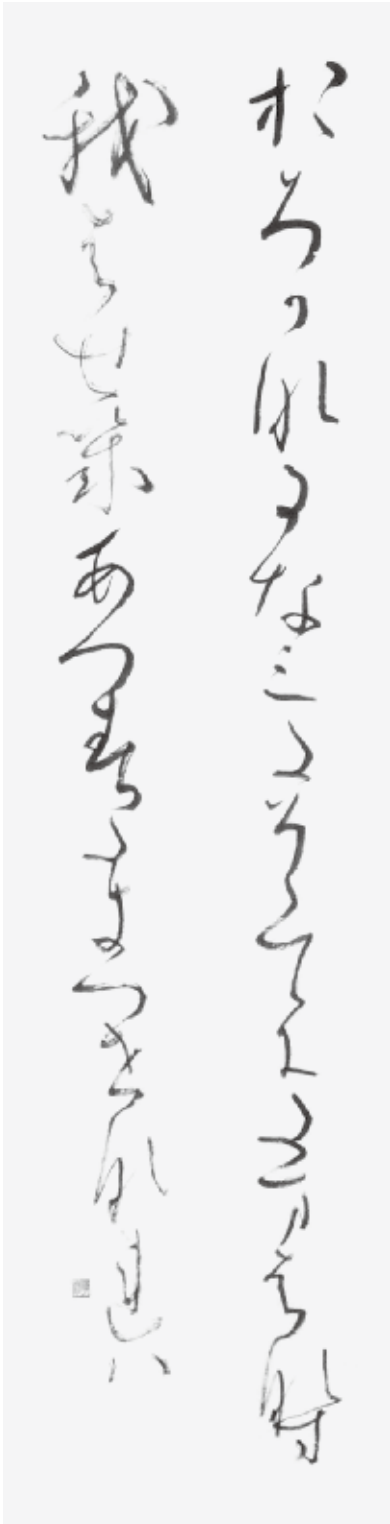
参考臨書

【筆路】

我はせきあへず
我はせきあへず
我はせきあへず
我はせきあへず

◎臨書条幅を書くときの注意 檜崎 華祥 臨

二行目行頭「我はせきあへず」を渴筆で力強く書き、見せ場をつくります。
「たまはなす」はたたみこむ様に字間の広狭をつけること。



【出品方法】

臨書作品1点、創作か倣書のどちらか1点の合計2点が出品できる。半切たて書きとする。

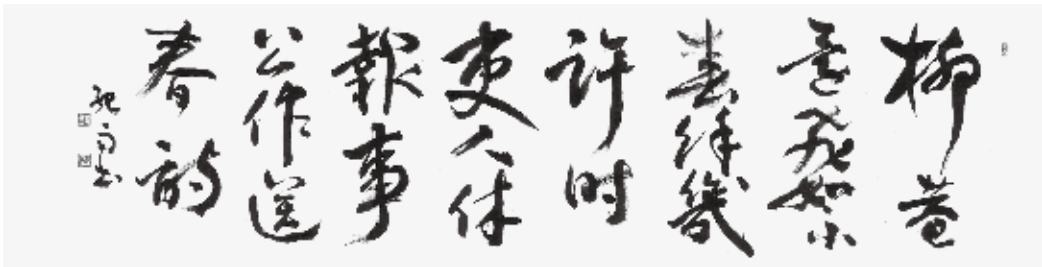
出品券にバーコードシール、条幅出品シールを貼付のこと。

※参考資料により語句の読み方、送りがな、筆者については異なることがあります。

- かな師範条幅部＝臨書部は本誌図版課題の語句部分又は各種古筆(選択自由)の臨書作品とする。
- かな条幅臨書部＝準師以下は本誌図版課題の語句部分に限る。

柳巷還飛絮 春餘幾許時
吏人休報事 公作送春詩

松山紀雨書



半切

田子の浦にうちいでて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ

板倉里佳書



半切

康寧

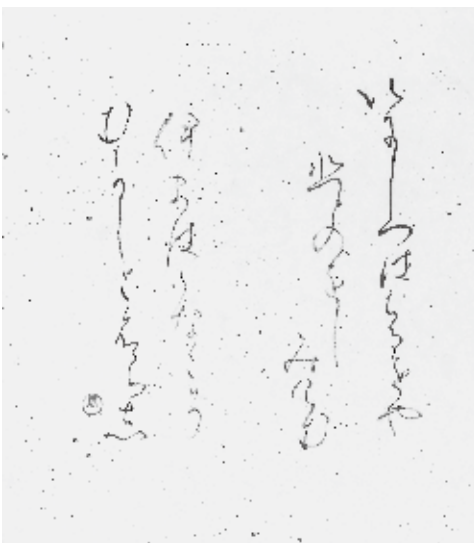
鈴木幸風書



半切 1/3

深窓秘抄

久田房子臨



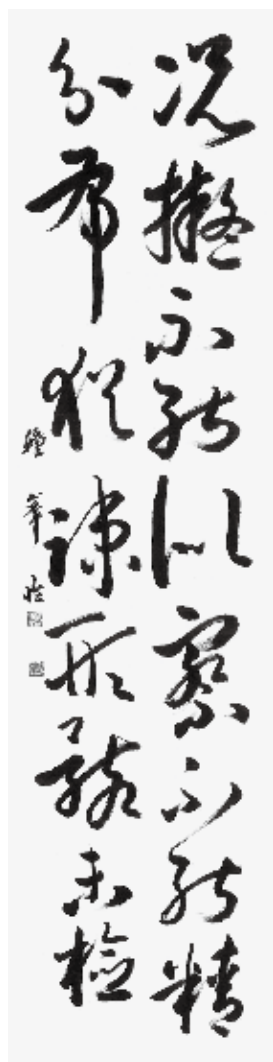
色紙

光明皇后 樂毅論

北見琇紅臨

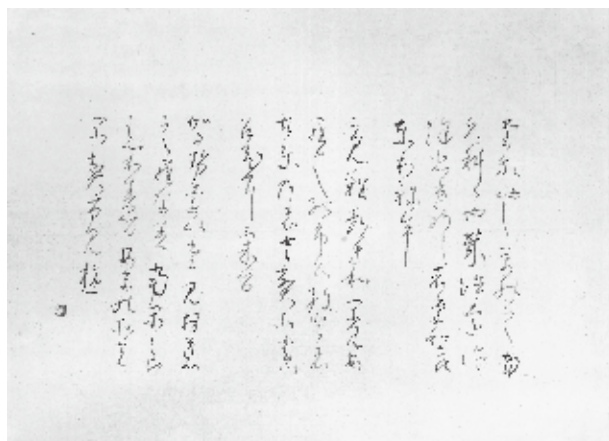


半切 1/2



書譜

半切



秋萩帖

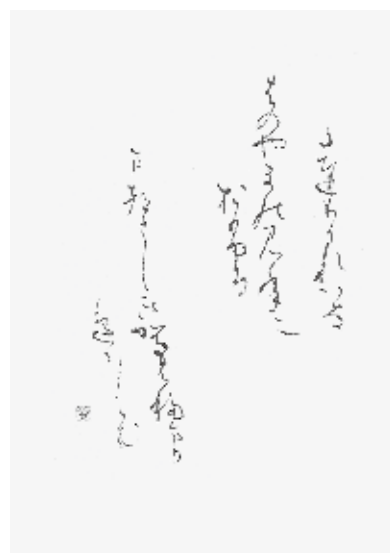
鈴木艶子臨



半切

天發神識碑

内津觀空臨



半懷紙

杉本善子書

立ち別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かばいま帰り来む



半切

福

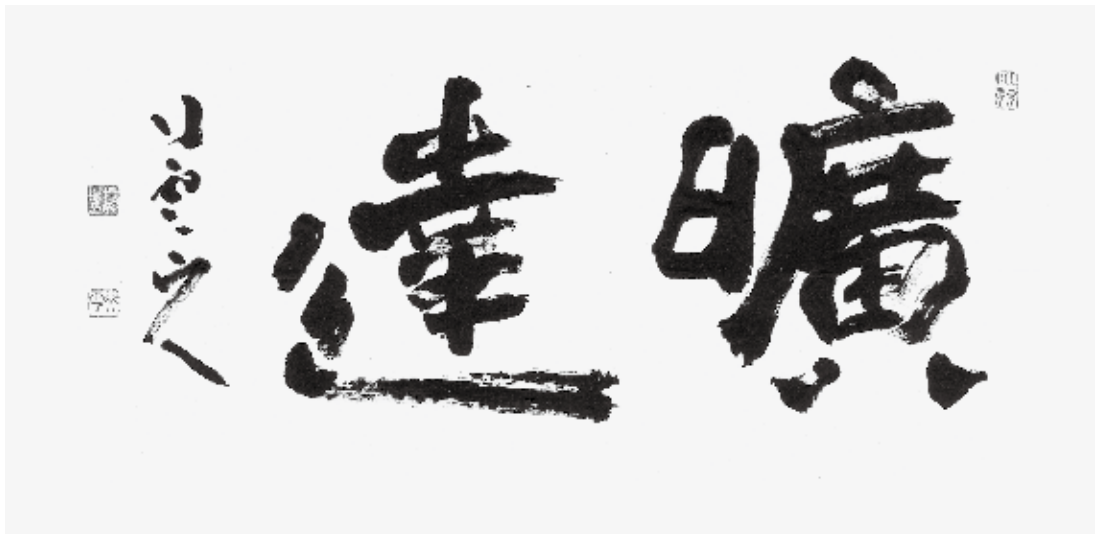
高市乾外書



半切
½

無事

堀 天 鶴 書



半切
½

曠達

福 山 行 雲 書